六月作品

☆今月の四人☆

明石大門　　宮里信輝　神奈川

明石大橋遊歩道より眼下にす「大和」恋ひ航く人麻呂の船
船上で歌を詠みゐる人麻呂をしのびて歩く明石大橋
人麻呂は想像つたらうか明石大門に橋がかかりて人歩くとは
船上の人麻呂は空見上げたり明石大橋より呼びたれば
船上の人麻呂からは見えぬらし明石大橋から呼ぶわれは

全豪オープン　　岡崎康行　新潟

夜の八時妻はもち来しヨーグルト机の上にそと置きて去る
柔らかき京のことばよをみなごら立場を生きてはぐくみたりや
音消して観てゐる全豪オープンの数万人の口ひらかれる
相伴をしようと父へのお供物をこの世のわれへ呼び戻したり
雪の降る気配はありて夜の部屋の窓は明るき鏡となるも

リュウグウとデブリ　　木畑紀子　京都

不正、詐欺、苛め、虐待ニュースみて日々の夕食早々に終ふ
テレビ見る愚者を洗脳する狙ひ一〇分置きの同じCM
小六の女児らわれより背が高く下校の会話に〈後妻業〉きこゆ
殺すゆゑ殺さるること怖れゐむ過剰警護の権力者たち
リュウグウの石採取され原子炉のデブリ取り出す術いまだ、嗚呼

大きな箱　　原賀瓔子　東京

をさな子の心でめざめ本を読み夜は老人のこころで眠る
ウインカーめきて棚からはみ出せる『ヘンリー・ダーガー』横長の本
夏以外、外套を着て外套がヘンリー・ダーガーその人だつた
さやうなら冬のオリオンひむがしの春の夜空にスピカのぼり来
わが持てるもつとも大き箱ならん箱の底にてスピカをあふぐ

☆

月集スバル

☆

水島晴子　兵庫

夜勤明け帰りゆくひと道端の猫にもの言ふ表情柔ら
寒暖のさだまらぬまま取り散らす部屋内にケアマネージャー来る
明日はまた何があるやと思はれて髪洗ふなり利かぬ手をもて
十歳の胸に無常を焼きつけて父は逝きけり春さむき昼
一茎の著莪の白さにひとすぢの涙をおもふ木下うす闇

杜沢光一郎　埼玉

メインクーン種のわが大き猫風格もいできてエンマの愛称似合ふ
欠伸すれば耳まで裂ける赤き口、狒々のごとかる牙のぞかする
ふさふさの長き毛の尾をふり立ててからだすり寄せ甘ゆるエンマ
本堂の暗がりから金の眼光らせて子供のわれを見詰めぬし閻魔
「嘘をこくな」と口開け睨めつけゐる閻魔老人となりたる今なほ怖し

武田弘之　神奈川

たたかひを終へきて共に「コスモス」を興したまひき先達四人
遺言とも詠みたまひけん「生活に根ざす真実を君ら詠みませ」
みづからを誇らず人にへつらはぬ歌のしづけき力恃まん
孫ほどの齢幼きがこんなにもするどき歌を詠めり天晴
お仲間にやがて入るべし「コスモス」の物故者名簿なつかしく読む

高野公彦　千葉

木が四つ集ふ村林三枝子さん世を去りて寂し令和きたるに
使ひ切りの一つのいのち大切なものゆゑしばし日の辻休み
死のことと葬儀のことを同列に論じる人をわが苦手とす
見ゆる物みなこの世なり現し身はこの世過ぎゆく一刷けの風
戦争がありて戦前といふ語出づ令和に入りて戦前あるな

仲宗角三重

氷片のごとくつめたき風吹きて軋みきしみて山とどろけり
酒ゆゑの疲れにひるをまどろめば山の井によるその声きけり
霧のなかのぼりきたりて大台に半日ゐたり悔の坩堝に
張り糸の風切る音の畑にせりけものみちたどり山を下りきつ
二十にて已に朽ちたる心もて生きこしかの日石鏃と在り

奥村晃作＊東京

光が丘公園の池覚えてシベリアから着きぬオナガガモ十羽
シベリアを発ちて来りしカモたちはトリなれば聞けず旅の話を
昨夜二羽飛来のカモがどれなのか分からねど嬉し十羽に増えて
色白で巨体で目玉碧く澄むジョージア出身の関取〈栃ノ心〉
「まだ、更に、寝れるだろうか」怖れつつ丑三つ時を目覚めています

森重香代子　山口

人の声聞かず昨日も一昨日も過ぎてさびしも未だ慣れざり
出・欠を訊ぬるのみの葉書にもこころは霽れてポストに向かふ
朝の片付け終れる頃を怺へがたく眠気は兆す　ふかみゆく老い
昨日よりまたおとろへて段を踏む足の重たく眠りに向かふ
行列の綺ひ賑はしきをとめらよコンピューター占ひコーナーの前

日影康子　富山

黙然と白粥たうべ淋しなど言はぬ老夫のこころを推量る
桐谷の古刹まもりてゆるがざりし君の一生をしのぶ春寒
小人めく黄のクロッカス庭に咲き高校生の男孫けふ卒業す
卒業生ら去りし校庭に春陽さしりんりんと潔し白梅の花
側溝といへども春の水澄みてひかりつつ流る孤独をのせて

古屋祥子　群馬

珊瑚寺はさくらのお山さくら咲きああ弘法の〝御教へ〟を継ぐ
美しきこの乗つ取りよ庭草を抽きてむらさき大根の花
これの世に光を撒くか白もくれん一樹また一樹大樹はこぞる
小鳥一羽うちに抱けるふくらかさ紫木蓮けさは春空のなか
赤城山はここが正面、とつて置きの場所に日毎を来ては見放くる

影山一男　千葉

小平墓地いつも明るし春の花供へて父母と祖父母と別る
次の駅までの五分の間に読む長編推理あと3ページ
わが影を出入りする蟻見てをりぬ公園の土湿める昼過ぎ
カーテンの蔓薔薇揺れて揺れやまず妻と娘が籠もれる午後を
春の雨木の肌濡らし過ぎゆけば鶯鳴けり人恋ふごとく

桑原正紀　東京

熊野路で吹雪に遭ひし二日後に瀬戸内海のひかりに温む
春潮のゆたにたゆたに打ち寄する室津湊にヒトデ乾けり
大阪城の石垣になりそこねたる巨石がふたつ春の日を浴ぶ
この海の果てのまほらを恋ひ恋ひて東征しけむすめろきの祖
美化されし神話なれどもつづまりは侵略・征服の歴史なるべし

狩野一男　東京

大切な歌の友から出し抜けに送られて来た「退会届」
歌を詠むことに気乗りがしないのでいち段落を付けたいらしい
短歌を詠み続ける気力が減退し、退会しようと決めたと書けり
悲しくてやりきれないぜ　退会しそれから何を為さむとすらむ
歌止めてゆくをとどめること出来ずインナーピースぐらつくばかり

小島ゆかり　東京

老年の娘の顔があるやうで娘の部屋の鏡おそろし
また母に激痛が来て母もわれも身動きならず疾風の春
八十八年生きて堪へしことどもの蜂起か母の下肢激痛は
処方箋もらひに行かん学生のころに暮らした西荻窪へ
深く重く疲れしわれにフェルメールの女ミルクを注ぎてくれぬ

島田暉　神奈川

浅草の夕焼けに焼け憶ひ出す道に転がる黒焦げ死体
リヤカーに鍋・釜載せて逃げる人炎に囲まれて焼け焦げにけり
空襲で焼け崩れたる火葬場に黒焦げ死体山と運ばる
ゴミ箱の蓋や雨戸やトタン屋根炎を引きてふつ飛んで来る
火の川を筏で逃げる人ねらひ急降下して機銃掃射す

もしも売ることになっても売れますと言われた土地の北側に寝る　大松達知＊東京

みぎひだりマグネットにて貼ってゆくみぎてジーザスひだりてクライスト

耳たぶを揉めば体温あがりたり　忘れなければずっと傷つく

飲み急ぐ、そんな言葉を作りつつ書き終わりたる十一時から

あんなにもそんなにもうまいラーメンと知りながらいまは食べたくはない　田宮朋子　新潟

庭隅の朽葉のかげに萌ゆる葉は紫華鬘（むらさきけまん）にまぎれもあらず

擬宝珠の若芽〈うるい〉はうすみどりあつさり茹でて酢味噌和へにす

花芽もつ片栗の葉がパック詰めされて売らるる野菜コーナー

岐阜蝶の棲む里山は遠からず車に乗れば五、六分ほど

ことことと水音ひびく径をゆく越の小貝母（こばいも）咲くところまで　津金規雄　神奈川

大理石の肌をおほひて流れゆく水よおまへの声を聴かせよ

交譲木（ゆづりは）は〈ゆづり〉済ませて木の元に長き葉を置くこの春もまた

うつむきて咲く覆盆子（きいちご）の純白に近づきて行く薄暮のなかを

空押（エンボス）しのしをりの跡のかそけくもありありとして歌集の余白

スカートの中へ入り来る春風に君は言ひたり「早いわ、まだよ」と

この春は妙にめるへんもの思ふ心に脳に花が咲きだす　小山富紀子　京都

縁側のすこし春めき缶の中鳩サブレーの鳩が鳴きだす

インスタ映えしないエクレア食べたくて少し昔のおぼろのまちへ

朧夜の帳めくればこぼれだすあの夜かの夜のさくらはなびら

「浪之音」のみてしのべり小さき蔵の若き杜氏と湖のなみおと　清水正子　神奈川

降る雪が根雪にならぬ日々をいひ少しさびしげ越のうたびと

米櫃に新潟の米〈つきあかり〉白くみたしぬ根雪おもひて

かき数ふ五郎丸屋の干菓子〈妹子（もこ）〉風邪ひきわれを甘くとろかす

テレビけさ逃亡ペットみみづくを映せり直屋隠りもたのし

北極の寒気あふれて悪さをす例へばわれの長引く風邪も　小嶋一郎　佐賀

義理立ての慶弔無くてうち過ぎぬ一月、二月、そして三月

雪を見ず一冬過ごす然（さ）は然（さ）れど二月は風邪で二十日も愚図る

付き合ひで読む総合誌今月も分からぬ歌は分からぬままに

然（しか）らばと深息一つ吐（つ）きてのち起き抜けのままゴミ出しにゆく

昼飯のあとの薬を飲み忘れ三時に気付くゆまりを垂りて　後藤美子　北海道

藻類とあれど和名は〈ミドリムシ〉原生動物鞭毛虫類

〈プラスティックの一つ易燃〉と辞書にあり「セルロイドって何」と不意に問はれて

〈主婦、主人〉厭へば使ふ〈無職、夫〉些細なこととわれは思はず

大袈裟な断言口調に信を置けず〈人づくり革命・働き方改革〉

ＡＩが感情を持つ日来らむかイギリスに生る〈孤独担当大臣〉

福士りか　青森

ゆるやかに「ながえんぶり」の摺りはじめ息しろじろと冷えのきはまる
太夫らの馬頭烏帽子の前房の揺れてシャンギの音が高鳴る
田の神をゆさぶり起こす「えんぶり」の農の所作なる舞のはげしさ
えびす舞・大黒舞に松の舞　子らが南部に春を呼び込む
学校は「えんぶり休み」若苗が二月の街を角付けまはる

藤野早苗　福岡

だまされる気で来しわれの斜め上ゆくエッシャー展のミラクル
上るため下る下るため上る　パラドックスの中の階梯
黒白のあはひに生るる灰色の無より飛翔す　黒白の鳥
はにかみ屋なるべしエッシャー絵の中に眼差あげる人つひに見ず
不条理と条理の往還　つかれたる脳なぐさむと菓子舗〈鈴懸〉

風間博夫　千葉

乗降客無き駅なれど駅なれば列車来て止まり発車してゆく
歩みきて古希迎へるも祝ひなく喜寿くらゐでは祝ひなからん
わが面はよくできてゐて妻を前にすればすかさずほほゑんでゐる
力の差歳をとつても変はらないひと月なれど妻は年上
角曲がりゆく君の背、映したるカーブミラーの縁に消えゆく

田中愛子　埼玉

〈おことば〉に「自由」「平等」あらざるを思ひて見上ぐはくれんの花
ものごとの終りはしづかはくれんを濡らして細き雨が降るなり
平日の昼に「この道」観賞す有給休暇とりたる君と
自転車を間にはさんで少年と少女あゆめり何をかたるや
「ただいま」より先にくしやみが聞こえたり春のゆふぐれどきの玄関

橘芳圀　新潟

拝まねば飯を食ふなと寺の子は言はれて拝むふりしてをりき
封建遺制のバラスの上に敷かれたる線路渡りて生きる寺の子
非僧非俗簡単ならず還俗ののちもなかなか俗にもなれず
ニーチェ説く「奴隷道徳」〈謙虚〉〈宥和〉戦時下の僧らそれを生きにき
東京のいびつな芯のふちなぞりオホリの脇の道通りくる

水上比呂美　東京

きさらぎの御苑に梅の咲き混じり照栲の白、明栲の紅
江戸城の松の廊下のありし辺に白き実つけて富貴草群る
尚蔵館に展示されゐる大御歌、御歌の結句動詞が多し
禁園の古品種の〈三宝柑〉と佐賀の〈デコポン〉遠き血族
外濠の鯉は『動植綵絵』など思ひてをらむ髭うごかして

鈴木竹志　愛知

美しき三人官女の細面ながめてあれば冬は逝きたり
久々にわが家の居間に出でませる雛人形は晴れ晴れとせり
細き目の雛人形の面々に見つめられてはきざす哀しみ
新しき家に住めるはわれらのみ雛人形は寄り添ひくるるや
五人囃子脇差をみな持ちてゐて大事のあらば守りてくれむ

水上芙季　東京

色あせたエプロンと腕カバーして参加す琉球ガラス体験
沖縄の風を含んだわが息でふくらんでゆく琉球ガラス
緋が碧にじゆつと変化す膨らんだ硝子をアイスクラックさせて
左手でまはし右手で整形す　ぐなぐな熱い琉球ガラス
傾きのかすかにありて手になじむ琉球ガラスの手づくりグラス

大野英子　福岡

孤立志向、否ドアノブがこはいからハンカチでそつと摑む冬ですケータイを忘れ出掛けたけふひとひ私の歩数は無きものとなる暮れどきがじよじよに伸びゆく日にちは時間長者となりゆく心地うがひする水の冷たさここちよきこよひ日記に「春」と書きたり抹殺をされるのかしら〈平成三十一年〉年齢早見表の上から

松尾祥子　東京

六十年前に祖父母にたまひたる雛人形なり孫に飾りぬ
丸顔のひな人形のおちよぼ口つむりてしづか見られゐるとき
不可思議な顔して匙を咥へをりはじめて粥を食みたる赤子
匙はこぶ前からまるく口をあけ子ツバメのやう粥待つ赤子
九十の母は刻んで0歳の孫はつぶして人参を食む

高野公彦著　平成30年11月刊　各巻二八〇〇円（税別）送料三〇〇円
明月記を読む　コスモス叢書第一一四八篇　短歌研究社
——定家の歌とともに　上下
著者住所　〒272-0114　千葉県市川市塩焼二—二—二—五〇六

奥村晃作歌集　平成31年2月刊　一四〇〇円（税別）送料三〇〇円
八十一の春　コスモス叢書第一一五〇篇　（株）文芸社
著者住所　〒175-0092　東京都板橋区赤塚七—一五—一六

第34回詩歌文学館賞受賞
小島ゆかり歌集　平成30年9月刊　二六〇〇円（税別）送料三〇〇円
六六魚　コスモス叢書第一一四三篇　本阿弥書店
著者住所　〒188-0001　東京都西東京市谷戸町二—八—二七—九一四

古屋祥子歌集　平成30年11月刊　一三〇〇円（税別）送料三〇〇円
地上根　コスモス叢書第一一四二篇　柊書房
著者住所　〒371-0116　群馬県前橋市富士見町原之郷一一二四